
センター ニュース

No. 9

1997.3.25

1. 教育実践研究指導センターの課題

センター長 吹貝 賢一

2. センターの設備・資料等の整備と利用状況

2.1 設備・資料の収集・整備

2.2 センターの利用状況

3. センターの活動

3.1 センター研究員

3.2 講演会の開催

3.3 「ワープロ講習会」の開催

3.4 「中学校英語科教育研究会」の開催

3.5 「インターネット説明会」の開催

3.6 「教育・福祉とエレクトロニクス懇話会」の開催

3.7 センターの研究

3.8 その他

4. 学内協力活動

4.1 授業

4.2 委員会委員

4.3 ネットワークおよび情報教育演習室

5. 学外協力活動

6. 国内の動向

6.1 東北地区センター協議会

6.2 第50回国立大学教育実践研究関連センター協議会

7. センター運営委員

弘前大学教育学部 附属教育実践研究指導センター

The Center for Educational Research and Practices

Faculty of Education, Hirosaki University

1 教育実践研究指導センター - の課題

センター長 吹貝 賢一

学校というと、試験を思い出す者は結構多いであろう。試験という思い出はあまり楽しいものではない。だが、楽しく取り組める試験も教師の工夫により可能である。ところで試験問題の有り様は生徒の学習方向や学習方法を左右する。生徒は意図的にしろ無意識にしろ試験の出題傾向を考えてそれに合わせて勉強をするからである。したがって、教師が考える望ましい方向に生徒を導き、あるいは生徒に望ましい学習態度・方法を身に付けさせようと思えば、その方向に添った試験問題を作成することにより、舵取りをすることができる。何も望ましい方向に生徒を導くものは試験問題だけではないが、試験問題でも生徒を導く大きな力を持っている。これは教師の意図が込められた教育活動は、それが試験問題作成であれ、授業そのものであれ、あるいは授業から脱線した話であれ、生徒が関心をもつものであれば生徒に大きく作用することの証でもある。生徒が関心を持つ事柄を通して教師は生徒を意図的に望ましい方向に導くことが可能であるとすれば、それを模索するのは教師の務めであろう。

いじめの問題が新聞やテレビ等で取り上げられてから今日まで、いまだに解決をみしていない。教師は決して手をこまねているわけではなく、様々な試みを行っているが、それでもなお有効な手立てが無いというのが現状であろう。いっそのこと生徒同士の自浄作用に任せてみるのもいいかもしれない。自分の記憶の中に「ああらこらら、い～けないんだ、いけないんだ。せ～んせいに言ってやる。」という囃子ことばがある。これは、誰かが悪いことをしている現場を見つけた時にそれを止めさせる絶大な効果があった。子どもは大勢の仲間からこのように囃子たてられると自粛してしまう。この現象は一人では恐くて言えないことでも皆揃えばいえることを意味する。ただし、だれかが最初に音頭をとる必要はある。最初に音頭を取り、皆に同調を求めるには勇気がいる。この勇気がちょっとした勇気ですむためには、多くのものに、正義感、是非の判断力のあることが前提となる。多くの児童・生徒に、正義感や是非の判断力と、このちょっとした勇気とを持たせる指導はできないものだろうか。試験問題ですら、生徒の方向付けが可能なことを考えれば、「急がば回れ。」でもよいから、児童・生徒の関心事を通して教師の意図する方向に児童・生徒を導くことを模索することは必要である。

試験問題作成やいじめ問題の例を引くまでもなく、児童・生徒の関心事を捕え、それにどのような意図を込めるのか、それをどのような手段・方法で、どのような方向に向けて指導を行うのが効果的か等々の教育実践上の諸問題、すなわち、生徒指導の諸問題や教科・領域指導等、教育実践の諸問題について、地元の教育委員会と連携して現場の教師が行う実践的研究の支援・指導を行い、実践センターとしての研究・指導体制の充実拡大を図るとともに、現職教師の再教育の場を提供し、現場教師と教育委員会と大学教官とがともに教育の実践研究を行えるようにセンターを発展させる必要があり、これがこれからの当実践センターの大きな課題になろう。

2 センターの設備・資料等の整備と利用状況

2.1 設備・資料の収集・整備

- (1) センター備え付けおよび貸し出し用の教育機器を整備し、共同利用を推進した。利用できる機器については「センター概要」あるいは「センター・機器一覧」をご覧ください。なお、本年度は、フィルムレコーダ (Polaroid Digital Palette) が新たに整備されました。パソコン (Mac, Win95) で作成したグラフィックイメージから 35mm スライドを作成できます。どうぞご利用ください。
- (2) 国立大学附属学校園研究紀要を整備し、閲覧に供した。
- (3) 教育実習資料を整備し、閲覧に供した。
- (4) ビデオ教材を整備し、閲覧に供した。430 点以上のビデオが整理してあります。詳細は「センター・ビデオ一覧」をご覧ください。
- (5) 情報教材を整備し、利用に供した。詳細は「センター・ソフト一覧」を参照してください。

(2) ~ (4) は資料室で閲覧できます。(5) はネットワークを通じて利用できます。また、機器一覧、ビデオ一覧、ソフト一覧の最新の情報はネットワークを通じて検索できますので、どうぞご利用ください。

2.2 センターの利用状況

本年度のセンターの利用状況は次のとおりであった。

自主学習室の利用	194 件	ワープロ 69 件, パソコン 74 件, ビデオ 10 件, 他 41 件
教材作成室の利用	239 件	印刷教材 56 件, パソコン教材 34 件, AV 教材 96 件, 文書教材 23 件, 他 30 件, カラーコピー 140 件 (2112 枚)
施設利用申請による利用	118 件	マイクロティーチング室 103 件, 自主学習室 15 件
物品等の貸し出し	163 件	ビデオカメラ 82 件, パソコン 3 件, 資料 30 件, 他 48 件

なお、貸し出し機器の問い合わせや予約は電子メールでも行えますので、どうぞご利用ください。メールアドレスは makanae@fed.hirosaki-u.ac.jp です。NIFTY や PCVAN などを通して学外からも連絡できます。

3 センターの活動

3.1 センター研究員

該当教育委員会の了承のもとに弘前市近辺の学校を中心として、広く研究員を公募した。学部教官、附属教官、一般の学校の教員等の中から 14 名の研究員を採用し、研究員の研究活動を援助した。5 月 11 日、7 月 6 日、10 月 19 日、2 月 15 日に研究員集会を開催し、3 月 8 日 (土) に研究報告会を開催した。研究報告会の参加者は 24 名であった。また、「研究報告書 第 5 集」を作成し、配布した。

研究テーマは次のとおりであった。

効力感向上操作を取り入れた学習支援システムの構築 (3)
 - 効力感向上操作の一要因としての統制感任地について -
 音韻意識を高めるためのコンピュータ教材の開発と授業実践
 - 精神遅滞児の平仮名習得の特徴と学習経過の検討 -
 社会的判断力を重視した学習
 - 5年自動車工業, 白神山地, 6年織田信長と天下統一を中心に -
 数学的活動を討議するプロセスと認知的徒弟制度 (2)
 - ランパート (Lampert) の教授事例との比較から -
 中学校教育に「あみだくじ」を!
 - 意味・構造を強調する数学の授業 -
 電動車椅子の操作装置の改造

精神薄弱用語学校におけるインターネットの学習利用に関する研究
 - 学習環境とカリキュラムの整備を中心とした取り組み -
 音楽教育とコンピュータ
 - 小学校音楽科における活用の実態から -
 「音楽芸術」誌掲載記事のデータベース化
 海外派遣生の一般生に及ぼす影響について

弘前市立文京小学校 藤田秀文

弘前大学教育学部附属養護学校
 中村修, 西沢勝則, 照井美紀子
 弘前大学教育学部附属小学校
 天内純一
 弘前大学教育学部附属小学校
 千葉正大
 弘前大学教育学部附属中学校
 吉田 修

重度身体障害者授産施設旭光園 久保真一
 身体障害者療護施設山郷館 河原優美子
 弘前大学教育学部附属養護学校
 川村泰弘
 弘前大学教育学部附属小学校
 三浦 忍
 肥田野恵里
 弘前市立北辰中学校 阿部笑子

なお, 次年度からは青森県教育委員会の後援を得て研究活動を行うこととなった。

3.2 講演会の開催

'96年10月26日 「英語の基礎力をつける工夫」 東京学芸大学 金谷憲氏

3.3 「ワープロ講習会」の開催

不定期に, 初級コースの講習会を実施した。コースの内容は次の通り。

初級コース: 日本語ワープロの操作技術の習得と教材作成

3.4 「中学校英語科教育研究会」の開催

本学部の高梨研究室(英語科教育)と当センターおよび東北英語教育学会の共催で, 不定期に中学校英語科の教育研究会を開催した。対象は弘前近辺の地区および奥羽本線沿線の中学校英語科教育関係者である。

3.5 「インターネット説明会」の開催

'96年11月7日 情報教育委員会と共同で, 「インターネットとその活用」と題して説明会を開催した。資料として「教育学部・ネットワーク利用ガイド'96」を作成し, 配布した。学内外から45名の参加があった。

3.6 「教育・福祉とエレクトロニクス懇話会」の開催

「教育や福祉とエレクトロニクスの境界領域」を共通の話題にし, 下記のとおり勉強会を開催した。

第 46 回 ('96.4.11)	音楽教育とコンピュータ	三浦忍 (附属小学校)
第 47 回 ('96.6.6)	The 津軽藩ホームページと地域振興	川嶋寛巳 (弘前商工会議所青年部)
第 48 回 ('96.10.3)	暗示によるリラクゼーション法とイメージ	高梨一彦 (医療技術短大)
第 49 回 ('96.11.7)	インターネットとその活用	小山智史 (教育実践センター)
第 50 回 ('96.12.5)	盲学校と情報機器	内田利男 (青森県立盲学校)
第 51 回 ('97.2.6)	海外の学校におけるコンピュータ利用	西沢勝則 (附属養護学校)

3.7 センターの研究

センターでは、下記の研究を行った。また、研究成果を関連する学会に発表し公表した。

- (1) 中学校英語科教育に関する研究
- (2) 教育実習の研究
- (3) コンピュータネットワークの教育利用に関する研究
- (4) 身体障害者用コミュニケーション機器に関する研究

3.8 その他

- (1) 障害者用ソフトパックの配布：身体障害者のための無料のソフトを集めた「障害者用ソフトパック」のコピーサービスを行った。配布先は、全国の教育機関、行政機関、福祉施設、個人等。収録ソフトは現在 68 点。1997 年からインターネットでの配布を正式に開始した。障害者用ソフトパックのホームページの URL は

<http://www.fed.hirosaki-u.ac.jp/~koyama/softpack/>

ftp サーバに直接アクセスする場合の URL は

<ftp://buddha.fed.hirosaki-u.ac.jp/fed/center/softpack>

です。

4 学内協力活動

4.1 授業

- (1) 学部:「教育工学」の開講

学部学生を対象に「教育工学」の授業を開講した。これに関連し、視聴覚教育用テキストおよび日本語ワープロテキスト、ワープロによる表計算テキストの開発を行った。吹貝担当の「教育工学 B, C」はワープロによる表計算を含めた講義と演習、「教育工学 D」は学芸員向けの講義、小山担当の「教育工学 A」はパソコンを使った講義と演習をそれぞれ行った。

- (2) 学部:「教育実習」に協力

昨年度に続き、教育実習のアンケートの実施と、事前指導での教育観察・参加の観点及び実習上の心得の講義を担当した。

- (3) 共通教育:「情報処理」に協力し、今後 2 年間に向けてのテキストの見直しを行った。

- (4) 大学院:「英語科教育特論Ⅱ」「英語科教育特別演習Ⅱ」「英語科教育特別演習Ⅲ」「英語科授業実践研究」の講義と演習等を担当

4.2 委員会委員

- 学部：教育実習委員会，情報教育委員会。
- 大学院：入試委員会，学務委員会，教育実践研究等実施検討委員会
- 全学：総合情報処理センター運営委員会，同技術専門委員会

4.3 ネットワークおよび情報教育演習室

全学および教育学部のネットワークの整備充実に協力した。また，学部情報教育委員会に協力し，学部ネットワークの管理を行った。

学部の情報教育演習室（所轄は学部情報教育委員会）の整備・運営に協力した。現在 PC9801RX 33 台，Mac5220 4 台が授業等で利用可能である。

学部情報教育委員会と共同で「弘前大学教育学部のホームページ」の試験運用を行った。「実践センターのホームページ」

<http://www.fed.hirosaki-u.ac.jp/center/>

には，研究員報告書のタイトルと要約，センターの活動内容などを掲載した。

5 学外協力活動

本年度の協力状況は次の通りである。

'96年6月26日	講演「インターネットの概要」	弘前市小学校視聴覚教育研究会
'96年7月24日	講演「マルチメディアの動向」	青森県総合社会教育センター
'97年1月29日	講演「マルチメディアの動向」	青森県総合社会教育センター
'97年3月4日	講演「外国人理解と交流の在り方について」	青森県木造町立向陽小学校

6 国内の動向

6.1 東北地区センター協議会

東北地区に北海道教育大学函館校を加えた7大学の実践センターで，カリキュラム改革調査研究経費の補助を得て，「インターネット上での教材開発とその相互活用に関する研究」（幹事校は秋田大学）および「新しい学力観に立つ教材研究・授業設計に焦点をあてた教科教育プログラムの開発」（幹事校は北海道教育大学函館校）を行なった。

これに関連し，下記のとおり弘前大学および北海道教育大学函館校を会場に共同研究会を開催した。研究報告は下記。

'96年12月7日 於弘前大学（参加者22名）

(1) 教師のコミュニケーションスタイルについて	岩手大	大河原清
(2) ネットワークを介した数学教材の提供について	北教大	中村紘司
(3) 渡島情報研究会の動向について	北教大(院)	毛利繁和
(4) 弘前大学教育学部のインターネットの活用状況	弘前大	小山智史

引き続き、'96年12月8日に「教育工学会・秋の学校」が開催された。

'97年3月15,3月16日 於北海道教育大学函館校(参加者17名)

- | | | |
|--|-----|------|
| (1) 体験を通じた学びの転換 | 福島大 | 鈴木庸裕 |
| (2) 教育実習調査結果から指導に反映させること | 弘前大 | 吹貝賢一 |
| (3) 岩手大学教育学部における教育実習改革について | 岩手大 | 塚野弘明 |
| (4) 児童・生徒の自己学習方略に関する予備的研究 | 山形大 | 広田信一 |
| (5) 授業における支援行動の類型化 | 北教大 | 鈴木淳 |
| (6) 地域のVTR教材の開発 | 岩手大 | 塚野弘明 |
| (7) 秋田県総合教育センターとの共同研究
～児童生徒のホームページ作成～ | 秋田大 | 浦野 弘 |
| (8) 対話型ページを大量生産する方法 | 弘前大 | 小山智史 |

6.2 第50回国立大学教育実践研究関連センター協議会

'97年2月17日、東京学芸大学で開催された。49大学から106名が参加。本学からは吹貝、小山の2名が出席。下記の議事および報告があった。

● 報告事項

- (1) 「国立大学教育実践研究関連センター協議会の現状と将来構想」発刊について
- (2) 科学研究費補助金(総合研究A)「広域ネットワークを利用した教育実践の試みと今後の課題」について
- (3) センター協議会の新たなプロジェクト研究について

● 協議

- (1) 「教育実践総合センター」の現状と将来構想
- (2) 体験的実習の指導と社会人の支援による教育活動
- (3) 大学間のSCS利用の実際と今後の展望
- (4) ネットワーク利用の小中高のカリキュラム開発について
- (5) 国際教育協力の今後の展開
- (6) プロジェクト研究の総括

7 センター運営委員('96年度) 印は小委員会委員

センター長	助教授	吹貝 賢一	教授会(～'98.3.31)
	助教授	吹貝 賢一	センター専任教官
	助教授	小山 智史	センター専任教官
	教授	村上 修	学務主任
	教授	星 邦男	学部運営委員会委員長
	教授	星野 英興	学部将来計画委員会委員長
	教授	山本 正	教科教育共通研究室長
	教授	渡邊 一夫	教育実習委員会委員長
	助教授	小玉 正志	情報教育委員会委員長
	助教授	平岡 恭一	教授会(～'98.6.20)
	教授	荒木 喬	教授会(～'98.6.20)
	助教授	猪瀬 武則	教授会(～'98.6.20)
	副校長	福土 兼義	附属小学校(～'98.6.20)
	教諭	斎藤 治	附属小学校(～'98.6.20)
	副校長	井上 雅敬	附属中学校(～'98.6.20)
	教諭	阿保 昭彦	附属中学校(～'98.6.20)

	副校長	大高	芳郎	附属養護学校(～'98.6.20)
	教諭	川村	康弘	附属養護学校(～'98.6.20)
	副園長	斉藤	啓子	附属幼稚園(～'98.6.20)
	教諭	成田	美晴	附属幼稚園(～'98.6.20)
オブザーバ	事務長	板垣	景千	
	技官	蒔苗	幸夫	

附属教育実践研究指導センター スタッフ

センター長 助教授 吹貝 賢一
専任教官 助教授 吹貝 賢一
専任教官 助教授 小山 智史 (koyama@fed.hirosaki-u.ac.jp)
専任職員 文部技官 蒔苗 幸夫 (makanae@fed.hirosaki-u.ac.jp)

センターニュース No.9

発行日 1997年3月25日
編集印刷 弘前大学教育学部
附属教育実践研究指導センター
代表者 吹貝 賢一
所在地 〒036 青森県弘前市文京町1番地
電話 0172-39-3487(事務室)
0172-39-3485(吹貝教官室)
0172-39-3486(小山教官室)
FAX 0172-39-3488